



青春の火は燃ゆ

マスターズの歩み第2弾

中、高齢者の健康へ関心高まり、全国的な大会へ組織固め

春4月。桜前線も南から北へ。開花が早かった地域は既に花見の季節が過ぎ去っているかもしれない。が、北の地域は見ごろを迎えているのだろうか。桜の開花季節が終わると、いよいよ本格的な陸上のトラックシーズン。各地でのマスターズ大会も始まる。皆さんの準備は万全だろうか。今月も誕生から発展してきた今日までの初期の段階を振り返ってみる。4月号に続いての第2弾。

関西初の壮年クラブ対抗

前号の西日本マスターズ陸上大会(1978/昭和53年・和歌山)の後を受けて、マスターズ陸上大会が各地に飛び火した。

日本マスターズ陸上連合が発足する1年前の1979年には、関西地区で第1回関西壮年クラブ対抗陸上競技大会が9月30日に兵庫県高砂市で行われた。個人の大会でなく、地域ぐるみで結成しているクラブ対抗とあって、応援の方も熱がこもった。

《クラブ対抗上位成績》

総合	
①和歌山マスターズ	182.5
②兵庫壮年クラブ	143
③北近畿マスターズ(兵庫)	77.5
④大阪ベテランズ	75
男子	
①和歌山マスターズ	140.5
②兵庫壮年クラブ	104
③北近畿マスターズ	69.5
女子	
①和歌山マスターズ	42
②兵庫壮年クラブ	39
③北近畿マスターズ、大阪ベテランズ	8

マスターズ発祥の地らしく和歌山が総合、男女の3部門で1位を占めた。個人の最優秀選手には女子35～39

歳の部5000mで18分23秒1と男性顔負けのタイムを出した村本みのるさん(38歳・大阪ベテランズ)がゲット。村本さんの記録は年齢に関係なく、この時点で日本女性としては最高水準といえた。この村本さんは後に、主婦で出場した大阪女子国際マラソンで活躍、初期の国内長距離のリーダー的存在となった。

男子優秀選手は40～45歳の部1500m4分29秒6、5000m16分39秒0の2種目を制した岩本辰男さん(41歳・兵庫壮年クラブ)、女子優秀選手に55～59歳100m16秒9、5000m26分04秒0の2冠達成した今津房枝さん(58歳・兵庫壮年クラブ)が選ばれた。

このほか、和歌山マスターズの鴻池清司さん(42歳)が40～44歳400m56秒2、走幅跳5m90と安定した走・跳を見せ、この夏に西ドイツ(当時)での世界マスターズ選手権に参加した競技力を披露。渡邊源太郎さん(62歳)も60～64歳100m13秒6、400m1分05秒8と実力的一端を見せた。

最高齢の72歳の角南信三郎さんは70歳以上100m16秒0、走幅跳3m33と元気いっぱい。また、山口からオープン参加した70歳の杉本正人さんが70歳以上100m14秒9の力走で、大きな拍手を浴びた。

昔取ったきねづかのオールド選手で

は1956(昭和31)年メルボルン五輪のハンマー投に出た小島義雄さん(兵庫壮年クラブ)も登場。48歳の小島さんは45～49歳の部砲丸投に10m96、円盤投で33m10を投げた。

同大会は前年の和歌山での西日本マスターズ大会に次いで開かれたが、その頃はこの種の大会がまだ珍しかった時代。この大会の前に兵庫県内で一度開催されていたが、国内第3弾のイベントだったのではないかと。

人気集中の杉本正人さん

関西壮年クラブ対抗の後、11月4日に発祥の地、和歌山で第2回西日本マスターズ陸上競技選手権大会があった。西日本とはいえ、北は岩手、富山、長野や関東、東海地区からの参加もあり、全国区の内容となった。28都府県から男女235人がエントリーしていた。

地元マスコミも紀三井寺競技場へ集まった。最も注目を集めたのは、4月号で紹介した山口の杉本正人さんの100mと200mの力走だった。1年前の69歳から70歳になっていた杉本さん。下アゴにぼうぼうと伸ばしたひげと、きりりと締めた日の丸のハチ巻がトレードマークだ。

100mを走った後、カメラのフラッシュを浴び、質問攻めにあった。とい

うのは「411」のナンバーカードを着け、70歳以上100mの5レーンを一直線に走り切り、14秒9でゴール。実はこのタイム、「暁の超特急」といわれ、1932（昭和7）年ロサンゼルス五輪の100mで6位入賞した吉岡隆徳さん（70歳・東京女体大教授）が10月21日に15秒1で走った、その記録を破ったのだ。

いわば年齢別日本新なのだ。世界記録にはわずかに0秒3及ばなかった。特別ゲストで会場に姿を見せていた吉岡さんは「おめでとう。私の記録より上だから、立派な70歳（以上）の日本記録だ」と祝福した。

杉本さんは雲の上の人の祝福に「ありがとうございます」と大テレだったが、レース前に「先生のタイムを破るつもりで頑張ります」と宣言とも思える言葉を口にして、実行に移したのだ。1年後に日本マスターズ陸上競技連合が創立され、全日本マスターズ陸上競技選手権大会が開催された後も杉本さんは“人気者”として注目された。

1980年4月1日に誕生

和歌山で開いた第1、2回の西日本大会が盛り上がり、参加者の声として「全国大会を」と熱望。こうなると実現へと動き出す必要が出てくる。鴻池清司さん自身は「荷が重い」と感じていたが、連合結成後、副会長の1人に就任する折橋辰雄さん（大阪）と、理事になる一本譲さん（福岡）が情熱的に鴻池さんに語り掛け、鴻池さんも「ウン」と言わざるを得なくなった。

高齢化が進むなか、高齢者の健康に対する国民の関心が高くなっているのは確か。とはいえ、一個人がいくら努力しても「空砲」に終わるのは目に見えている。ここは全国的な組織をつくり上げる必要がある。そのためにはしかなるべき人を会長にして、が大切だと。

鴻池さんのお眼鏡にかなった人物といえば、スウェーデンの世界ベテランズ大会に顔を出していた織田幹雄さんである。織田さんといえば1928（昭

和3）年アムステルダム五輪の三段跳に優勝、日本人金メダル1号になった人だ。

世界ベテランズ大会を見にスウェーデンまで足を運ばれたので、中・高齢者に対する識見も豊かなはず、と判断。

そこで思い切って一本さん、折橋さんと鴻池さんの3人そろい踏みで東京、織田さんに会長職を依頼した。1980年2月の寒い日だった。理解を示した織田さんは快諾されたばかりか、副会長候補として西田修平さんを紹介してくれた。

西田さんもまた、棒高跳の第一人者として活躍。1936（昭和11）年ベルリン五輪で有名な“友情のメダル”の逸話が生まれ、教科書に載ったほどの人物だ。織田、西田の巨頭体制で固まり、しかるべき人材を選び組織づくりをして、4月13日に第1回理事会を大阪で開いた。

正式な船出は1980年4月1日である。当時の名称は日本中高齢者陸上競技連合だ。連合結成がなされ、西日本大会を解消。全日本大会を10月17、18日にマスターズ発祥の地、和歌山で開くことに決まった。

組織固めに協力し、情熱を持ってマスターズ連合に尽力、リードした会長の織田、副会長の西田、渡邊源太郎（当時、和歌山）、折橋さんらは今はない。既に100歳の渡邊さんを除き他界。専務理事を長年務め、今は会長の鴻池さんは現在も感謝の念を忘れない。

1981年に「会報」を創刊

1980（昭和55）年に日本マスターズ陸上競技連合（当時・日本中高齢者陸上競技連合）がスタートを切った1年後の1981年4月1日に「会報」創刊号が出された。その後、継続されて昨年の2017年・35号までに。今年の2018年は36号を予定。

創刊号の内容は86ページ。第2回全日本中高齢者陸上競技選手権大会を開く山梨県甲府市長・河口親賀氏の「第2回大会歓迎のことば」に始まり、連

合・織田幹雄会長の「発刊のことば」、同・西田修平副会長の「ベテランズの輪をひろげよう」を。

続いて同じく渡邊源太郎副会長が「世界ベテランズ選手権大会に参加して」の感想を述べ、次に山梨中高齢者陸上競技連盟・渡辺三郎会長の「山梨大会を成功させよう」と題してペンを走らせている。

この後、第1回大会の最優秀選手賞を受賞してと題して、男子の和歌山マスターズ・冷田嘉幸さんと、先月号で触れた女子の鳴門MAC・渡川孝子さんが感想を述べている。

お互いに喜びを表現した後、50～54歳・100、200、400m、4×100mリレーの4種目を制した冷田さんは「50歳で陸上の仲間入りし、素晴らしい大勢の仲間づくりと、心の触れ合いに今までになかった人生の喜びを感じている」とつづる。

渡川さんは35～39歳・100mでライバル高橋（旧姓・三嶋）恭代さん（和歌山マスターズ）とのバトルのレース模様をユーモアたっぷりに書き、13秒4の同タイムで勝った感動を。さらに「この大会には老後の自分のあり方を考えさせていただける教訓の場と思い、体力低下を少しでも遅らせ、気力を養う事ができると確信しておりますので、時間の許す限り、参加させていただき所存でございます」と続ける。

創刊号の目次によると、まだまだ盛りだくさんの内容になっている。読み物だけでなく、第1回大会の記録、第4回世界ベテランズ大会に参加した日本選手団の成績、年齢グループ別日本最高記録、1980年度全日本中高齢者陸上競技5傑表などが収録されている。外国の記録なども付け加えてある。第1回大会で選手宣誓した創刊号編集長の石井茂十郎さん（和歌山、日本歌人クラブ会員）はこう詠んだ。

クラブ旗を握る掌も汗ばみてわが宣誓の声うわずりぬ

なお、第1回全日本マスターズ大会については紹介していないが、スペースの都合により次号以降で触れたい。